岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

起因を表す格助詞「に」「で」「から」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 敏弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3690

起因を表す格助詞「に」「で」「から」

山田敏弘

1　はじめに

ある名詞句が，主語を含むほかの名詞句と述語とで表される事態に対し，何らかの因果関係を持つ場合，その名詞句を起因と呼ぶ。

起因を表す格助詞には「で」「に」「から」があるほか，複合形式の「のために」「のせいで」「によって」「につき」「とあって」なども起因の意味を持つ。

(1) 今回，鳩山氏と大学側の抗議で，番組放映は取りやめたという。(朝日)

(2) すべての銃，すべての軍艦，すべてのロケットは結局のところ，食べ物もなく飢えている人や，着る物もなく寒さにふるえている人びとからの強奪品である（天声人語）

(3) 若者の街という場所柄からか，若い観客が半数以上を占めるなど，年配客中心のいつもとはちがった劇場風景だった。(天声人語)

(4) 男の色気，とやらいうものなのだろう。鶴田の演ずるいなせな侠客は絶品だが，その色気のために，きれいすぎて存在感がやや希薄な場合があった。(天声人語)

(5) 東京西郊の奥多摩では，里におりてウサギを襲ったツキノワグマが射殺された。長雨のせいで，夏の山にみのるヤマモモなどが口にはいらない。(天声人語)

(6) 大型プロジェクトが住民のくらしに本当に必要なのかどうか。バブル崩壊によって，企業も自治体も，冷静に足元を見直す機会が提供されたと考えたい。(朝日社説)

(7) 南館改修工事につき閉店中（ひだプラザホテル内店舗案内）

(8) 今年は猛暑だったとあって，週末には常に周辺住民や参拝客が数十人単位で訪れ，空のペットボトルを持って水くみする姿が多く見られるようになった。(京都新聞)

本考察では，特に格助詞に限って，従来言われている起因の用法を整理するとともに周辺に存在する手段などの用法との違いを，格助詞の形式ごとに考えていく。

なお，用例については新聞やテレビなど，地域によって日付がずれたり，版が変わっ

たりする可能性があるため，名称を実例であることを示すために入れるにとどめる。

2 「で」

2.1 起因を表す「で」の基本的な用法

デ格名詞句を起因の意味で用いていると考えられる用例には次のようなものがある。

(9) 強い風で看板が倒れた。 [事態の原因]

(10) 急用で家に帰った。 [行動の理由]

(11) 療養で温泉に行った。 [行動の目的]

(12) 紙で手を切った。 [非意志的事態生起の媒介物]

これら4用法は同等に「起因らしさ」を持つわけではない。

デ格をとる名詞は出来事性の名詞である。モノ名詞では起因の意味を表しにくい。

(13) 米国が音頭をとった対ソ経済制裁は結局，穀物を売れなくなった米農民の突きあげで崩れてしまった。(朝日社説)

(14) *ショベルカーで壊れてしまった。

事態の原因を表すデ格を用いた(13)では出来事性の名詞「つきあげ」が用いられている。この名詞を「ショベルカー」のような出来事性のないモノ名詞に置き換えた(14)は単独の文としては非常に不自然である（この点については後述)。起因を表す名詞の出来事性の観点から見ると，(12)のような非意志的事態生起の媒介物を表すデ格は周辺的な存在である。

また，デ格には手段・道具としての用法もある。

(15) ゴルバチョフ書記長とも電話で話したばかりだ（朝日社説)

手段・道具と起因の違いは，先に述べたデ格名詞の出来事性も1つの要因であるが，述語の意志性も大きく関わっている。

(16) 裏木戸を叩く音で母は眼をさました。(「祭りの場」林京子)

(17) 目覚ましの音で子ども達をわざと起こす。

(16)は非意志的な行為の起因を「(裏木戸を叩く)音」が表しているが，(17)では同じ「音」が意志的行為「起こす」の手段として用いられている。

このような述語の意志性が起因であるかどうかを区別する基準であるとすれば，(10)や(11)のような「帰る」「行く」という意志動詞を用いた文のデ格が，果たして起因を表しているかという問題が出てくる。

以下，これらの問題に注意しながら，それぞれの用法ごとに詳しく見ていく。

2.2 事態の原因

述語およびデ格名詞句を除くほかの名詞句によって表される非意志的な変化や状態の

起因がデ格で表された用例としては，次のようなものが見られる。

(18) 前夜の強風で，咲き始めたばかりの白い萩（はぎ）の花がずいぶん地面に落ちた。（天声人語）

(19) 高原さんは，在宅の寝たきり老人のためにも，介護で疲れ切った家族のためにも，特別養護老人ホームへの一時入所や入浴サービスは助けになる制度だという。（天声人語）

(20) その竹がやっと今朝着いたら，肝心の監督役のその男は，昨日から風邪で寝込んでいると言うのである。（「闘牛」井上靖）

(21)（宝塚の男役から女優になった話）彼女はどうやったら女になれるかということで悩みまして，そして，まず子供である僕に対する愛情，つまり母親としての愛情から女を演技的につかみたいと。（「さくら隊散る」新藤兼人）

(22) 宗教家，山田無文は若いころ，禅の修行中に結核で倒れ，医者からも見放された。（天声人語）

この場合，デ格名詞句は出来事性の名詞であり，「強風」は「強風が吹いたこと」などの節と同等の意味を有して出来事に関与している。このような節を用いるならば，「強風が吹いたから/ので」など複文表現となる。

「～ことで」の形式をとるものに関しては，「から/ので」と次のような違いを見せる。

まず，「から/ので」は後件に意志的事態をもとるが，「～ことで」は意志的事態をとらない。

(23) 危険です｛から/ので/*ことで｝黄色い線までお下がり下さい。

(24) 風邪をひいた｛から/ので/*ことで｝早く帰ろう。

(23)は依頼，(24)は意志表出の表現を後件にとり，前件はいずれもそれら後件の行為の理由を表しているが，「～ことで」にはこのような行為要求の理由・根拠を表す用法はない。これは格助詞としてのデ格でも同様である。

(25)*風邪で寝てください。

また，「から/ので」に存在する，後件に示される判断の根拠を表す用法も格助詞の「で」および節に後接する「～ことで」にはない。

(26) *バスの定刻通りの発着で道はこんでないのだろう。

(27) バスが定刻通り来ている｛から/ので/*ことで｝道はこんでないのだろう。

「から/ので」と置き換えられるのは，もっとも典型的な事態の原因を表す場合である。

(28) 風邪で学校を休んだ。

(29) 風邪をひいた｛から/ので/ことで｝学校を休んだ。

ただし，「ことで」を用いると多少，大仰な感じが否めない。

また，「から/ので」は(30)のように前件の過去の状態を過去でも非過去でも表すことができるが，「ことで」は(31b)のように過去でしか表せない。

(30) 家が｛古い/古かった｝から，冬は寒さに凍えていた。

(31) 家が｛a. *古い/b. 古かった｝ことで，冬は寒さに凍えていた。

このことから「〜ことで」は接続助詞として文法化した形式ではなく，形式名詞に格助詞の「で」がついた複合形式と考えられる。

2.3 行動の理由

通常，意志動詞に分類される動詞を述語にとる，次のような用例も起因の一種であると考えられる。

(32) 所用で北陸へ行った時，たまたま上演していた劇団こまつ座の『きらめく星座』（井上ひさし原作）を見た。（天声人語）

(33) 彼は急用で学校のそばの宿舎にもどってきたのだが，それをすますと伊佐の足のことを思いおこしたのだ。（「アメリカン・スクール」小島信夫）

(34) 出張で東京にきていた兄がダンボールの箱二つを携えてタクシーでのりつけた。（「愚者の夜」青野聡）

これらを起因と考える理由は，「急用で〜宿舎にもどってきた」を例にとれば，「急用があったことで〜」とパラフレーズ可能である（実際には「急用があって」のようにテ形が代替表現となることが多い）こと，すなわち，「急用」という時間的に「宿舎にもどってくる」という述部が表す事態に先行する出来事性の名詞が「宿舎にもどってくる」という出来事を引き起こしている関係にあることにほかならない。

また，このような行動の理由を表す文は，通常，述部は過去形をとる。このことは述部が意志動詞でありながら，意図性からは解放された存在であることを表している。

述部を意志的なモダリティに置き換えると非文法的になる。

(35) *所用で北陸へ行こう。

(36) *急用で戻ろう。

ただし，次のような用例も見られなくはない。

(37) そうさ。あした時刻にわたしが急用で逢いたいからって使をよこしてみましょうか（「野分」夏目漱石）

2.4 行動の目的

起因を表すデ格と考えられる中には，次のような目的を表すと考えられる用法もある。

(38) 仕事で秋田行く前も同じや，夜も別々に寝るんやで，別に俺何もしてへんの

になあ。(「限りなく透明に近いブルー」村上龍)

(39) 日本テレビ側は報道目的で撮影したとしても，撮影を依頼した楢崎代議士側に，証拠保全の意図があったことは明らかだろう。(朝日社説)

(40) 前知事は，公判の打ち合わせで東京に行く以外は，保釈の条件で居住地に定められた徳島県内の自宅で過ごす。(朝日)

目的となる行為は時間的に述語に表される行為に先行しない。この点で，行動の目的の用法は，述語に表される事態に先行する起因からはかなり離れている。

デ格で表される(38)〜(40)の用法を起因の一種と考えるのは，「療養」などの目的を持った時点，あるいは目的を持たざるを得なくなった時点は，述部に表される事態に先行するものであり，そのような目的意識から述部事態が引き起こされると捉えるためと考えられる。言い換えれば「予定的原因」とでも言えるであろうか。

このような目的を表すデ格名詞をとる構文では，前節で見た行動の理由と同様，基本的に述語として意志動詞が用いられる。しかしながら，この述語は行為が意図的に行われたことを表していても，意志的に行おうとする態度を表せない。

(41) *療養で温泉に行こう。

(42) *お父さんの看病で病院に来てください。

(41)(42)の場合，目的を明示するニ格か，あるいは「のために」などを用いなければならない。

デ格で表される目的は，あくまでも生起した事態を引き起こすための理由となる出来事でなければならない。(41)(42)のように未確定の事態に対して，それを生起させる理由を表すものではない。この点で，デ格による目的表現はニ格と異なり，起因的な性質を持っているものと考えざるを得ないのである。

2.5 非意志的事態生起の媒介物

述語が変化などの非意志的事態を表す場合，その事態が生起するに関与したモノがデ格で表されることがある。

(43) ほこりで息もできず，ヘルメットをバケツがわりにして水をかぶっては掘り進んだ。(天声人語)

(44) …遊んでいた子どもが倒れてきた遊具で怪我をし…(NHKニュース)

このようなモノは事態生起を引き起こした点で，やはり起因と特徴を共有するものと考えられる一方で，このような媒介物は出来事性を欠いている。出来事性を欠く名詞が起因となるのは，基本的にモノである手段・道具との連続性によるものと考えられる。

(45) 真空乾燥したものを薄く切り，油でカラッと揚げるそうだ。(天声人語)

(46) 油でカラッと揚がった天ぷら。

(47) 男は三人の子を道連れにしようとする前に，妻を包丁で刺し殺していた。(天声人語)

(48) 誤って包丁で指を切った。

(46)(48)のような非意志的事態と共起するデ格は，ここで言うところの非意志的事態生起の媒介物である。「油」や「包丁」がなければ「揚がる」「指を切る」という事態は生じていない。すなわち，これらのデ格名詞句は起因である。

一方，(45)(47)のような意志的行為と共起するデ格は，これは手段である。ガ格に表される動作主がデ格の要因を使って述語に表される行為を実現させている。

ただし，純粋にモノ的な名詞がなんでもこのような用法で用いられるわけではない。

(49) *太郎が包丁で死んだ。

(50) 太郎が次郎を包丁で殺した。

(49)はやはり単独では言いにくい。(46)(48)が言えるのは，あくまで「油」や「包丁」が手段として使われた出来事が読みとれる場合であり，その出来事が述部の出来事と因果関係をもっているためである。(49)のように「包丁」を手段として使っても，その出来事が述部に叙述された「太郎が死んだ」という出来事と結びつきが弱ければ因果関係は生じない。なお，「太郎が包丁で自殺した」のような意志的行為であれば(50)と同じく手段・道具の用法である。

ただし，次のような場面では純粋なモノ名詞であっても，ここでいう非意志的事態生起の媒介物として自然に用いられうる。

(51) 太郎はその金属製の箱を壊そうと何回も叩いてみた。手で叩いても壊れない。木槌で叩いても壊れない。金属製ハンマーでようやく壊れた。

「手で叩く」「木槌で叩く」のデ格は手段としてのデ格である。最後の「金属製ハンマーで」は意志的他動詞「壊す」であれば手段であるが，この場合，「壊れる」という自動詞である。これはどうやって解釈することができるだろうか。

1つには，「金属製のハンマーで叩いたらようやく壊れた」のように「叩いたら」が省略されていると考える方法である。なんでも省略されていると捉えることは危険であるが，この場合，前の文章から「叩く」という意志動詞が容易に読み取れ，このような動詞の省略は根拠のある主張として説得力がある。

「5時で店を閉める」のような時間的な終了限界を表すデ格が用いられているという解釈もあるが，「木槌では壊れずに金属製ハンマーでようやく壊れた」のように限界でなくても「で」を使えることから，終了限界とは解釈しにくいであろう。

いずれにしても，手段としての読み込みが相対的に見て可能である場合に，純粋なモノ名詞が非意志的事態生起を引き起こす起因として用いられるものと考えられる。

2.6　まとめ

本節ではデ格の起因を表す用法を見てきた。

結果としてデ格による起因は，非意志的な用法に対し基本的に用いられるが，意志的行為の意図性が感じられない場合にも用いられ，その場合，行動の理由や目的の用法となることが導けた。また，デ格による起因では，デ格がとるのは出来事性の名詞であるが，手段・道具の用法との連続性から非意志的事態生起の媒介物の用法へもずれていく。図にまとめると以下のようになる。

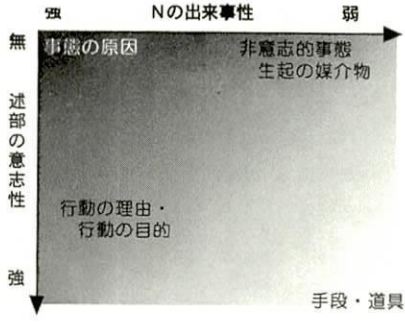

図1　「Nで」の表す意味

3　「に」

ニ格名詞句も，述部とニ格以外の名詞句とによって表される事態の引き起こし手を表す用法を持つ。デ格の用法との違いについて，ニ格は出来事性の名詞につき，述部が非意志的な場合，すなわち，デ格の用法でいう事態の原因の用法の場合に，その一部で用いられる。

なお，ここでは，いわゆる受身文の動作主を表すニ格，および目的を表すニ格は除外して考える。その理由は，受身文では述部が形態的に他からの受影を保証しており，述部の特徴としてここで扱う原因・理由表現とは（連続している性質は否定しないものの）異なっているためである。また，目的の場合，ニ格名詞句が表す出来事は述部に表される出来事に時間的には後になる点で大きく異なっているためである。

以下，事態の原因の用法について詳しく見ていく。

3.1　基本的用法

「に」は感情・感覚など精神的・生理的状態や変化を表す述語とともに用いられ，その状態あるいは変化をもたらす原因となるできごとにつくことが最も多い。

(52) ふと傍で誰かがだんだふみわめきちらす声に目を覚した。(「異邦人」辻亮一)

(53) 秋山「大丈夫か?」／トモ「(その優しさにほっとして) ええ」(「ロックよ，静かに流れよ」長崎俊一)

(54) かじかむ指に息をかけ，足の冷たさに足ぶみしながら，わたしは思いだすともなくあのカメ虫のことを思いだすのです。(「月山」森敦)

(55) われわれは，後進カースト優遇策をめぐるカースト間の対立や，ヒンズー寺院建設をめぐるヒンズー，イスラム教徒の対立など，インド社会の混乱が激化しつつあることに心を痛めてきた。(朝日社説)

その他に，次のような出来事的な変化の原因を表す場合にも用いられる。

(56) 前夜の強風に，咲き始めたばかりの白い萩（はぎ）の花がずいぶん面に落ちた。cf. (18)

(57) 球上では，新鋭の兵器が次々と生産される一方で，飢餓に倒れ，極貧にあえぐ人々が後をたちません（天声人語）

さらにニ格には，述部が継続する自然現象の起因を表す用法もある。

(58) 夜霧に濡れる北アフリカの港町，喧騒の中に物哀しさをたたえた居酒屋の一隅（シナリオ「寅次郎純情詩集」）

(59) 空気が澄んで，木の葉が雨に濡れてキラキラ光って。(シナリオ「口笛を吹く寅次郎」)

3.2 デ格との違い

前節(52)〜(59)の用例のうち，デ格に置き換えられるものは次の通り。

(52)'ふと傍で誰かかだんたふみわめきちらす声で目を覚した。

(55)'インド社会の混乱が激化しつつあることで心を痛めてきた。

(56)' 前夜の強風で，咲き始めたばかりの白い萩（はぎ）の花がずいぶん面に落ちた。＝ (18)

(57)' 球上では，新鋭の兵器か次々と生産される一方で，飢餓で倒れ，極貧にあえぐ人々が後をたちません

(58)' 夜霧で濡れる北アフリカの港町，喧騒の中に物哀しさをたたえた居酒屋の一隅

(59)' 空気が澄んで，木の葉が雨で濡れてキラキラ光って。

(53)は基本的にデ格では置き換え不可と考えられる。また，(54)もやや不自然に感じられる。

(53)'*その優しさでほっとして

(54)'?かじかむ指に息をかけ，足の冷たさで足ぶみしながら

逆にデ格のみが可能でニ格が不自然な用例には次のようなものがある。

(60) 勤めている清掃会社でトラブルがあった上，借金｛で/*ニ｝むしゃくしゃしていた（岐阜新聞）

(61) 昨日から風邪｛で/*ニ｝寝込んでいる　cf. (20)

これらの用例の違いは，まず述部をいくつかのタイプで考える必要がある。

第一に述部が感情・感覚等の精神的・生理的な状態や変化を表す場合には，継続する感情を引き起こす起因に対してはデ格が用いられやすく，(53)のような一時的な反応とも言えそうな場合にニ格が用いられる傾向が見られる。

(62) 子育て｛で/?に｝いらいらしていた。

(63) こどもの鳴き声｛?で/に｝いらついてしまった。

継続する感情の起因は，述部の出来事と起因となる出来事とが時間的に併存するのに対して，一時的な反応の場合には，起因は述部の出来事に時間的に先行する。(61)の場合には，起因となる「風邪」と「寝込む」こととが時間的に同時であるためにデ格が選択されているものと考えられる。

ただしこのような感情・感覚の継続性は相対的に弱い要因であり，起因となる名詞の出来事性も関与すると考えられる。すなわち，起因が出来事的である場合にはデ格をとりやすく，当該の感情・感覚の刺激となるモノなどの場合にはニ格をとる傾向がある。

(64) 2歳の男の子の子育てでいらいらすると，お酒を飲んでしまうことが多くなっており，不安です。

(www.oyako-net.com/kosodate/g10_seikatsu/ 10_04_sake.html)

(65) 先日も，電車内で，シャカシャカという音に，いらいらしてしまいました。

(oldriver.org/torumemo/?029)

(66) {ちょっとの物音/着信音/女性の仕草/...} でドキっとする。

(67) {女性週刊誌のタイトル/いつもと違う彼女/「人間ぽさ」/...} にドキッとする

(64)(66)は「子育て」などの出来事であるのに対し，(65)(67)はそのような感情・感覚の起因となるモノである。

(60)のニ格の不自然さはこのような両方の要因によるものと考えられる。

第二に，述部が人間の精神的・生理的な状態や変化でない，自然現象などである場合，基本的にはデ格でもニ格でも大きな差はない。ただし，(58)(59)のような「夜霧」「雨」が「濡れる」という状態に時間的に先行する原因ではなく，現在の状態に併存する状況的物質である場合には，ニ格の方がより自然に感じられる。たとえば次のように時間的に先行する原因であることが明白な場合，同じ「雨」と「濡れる」であってもニ格は言いにくく感じられる。

(68) 昨夜の大雨｛で/*に｝まだ路面が濡れている。

4．「から」

最後に「から」を見ていく。

「から」は直接は結びつきにくい原因，すなわち遠因を表す場合に用いると言われている。

(69) たばこの火の不始末から火事になった。

しかし，遠因とはいったいどのような性質の原因なのであろうか。時間的に遠いものであるのか，プロセスとして遠い因果関係と捉えられるのであろうか。

(69) に関しては，「たばこの火」がすぐ「火事」になったのではなく，ある程度の時間をかけて広がって火事へと至ったことが感じられる。その点では段階的なプロセスも感じることができる。

しかし，次の(70)などでは，そのような時間をかけて段階的にということが感じられない。

(70) 筑豊から帰京すると，過労から最初の脳出血で倒れる。その後も入退院を繰り返しながら，車いすに乗って左手でシャッターを押し続けた。(天声人語)

(71) 有望な政治家が，支援者の不注意から議席を失うようなこともあったようだ。（朝日社説）

(72) 米国では株価暴落の後遺症から消費が鈍り，今年は車の需要が落ちそうだ。（朝日社説）

これらの用例から考えると，「から」で表される原因は，述部の出来事に変化する前の状態であることが読みとれる。たとえば「たばこの火(の不始末)」が「火事」に変化する，「過労＝軽い症状」が「脳出血＝重い症状」になる，「不注意」が「議席を失うこと＝惨事」になるなどの変化が読みとれる。このような変化と考えれば，「信号が赤から青に変わった」と同じ「から」として，起因の「から」を捉えることができる。

このような変化がない場合には「から」で原因を表すことはできない。

(73)*大風から看板が倒れた。

(74)*肺炎から死んだ。

(73)では「大風」が「看板が倒れたこと」に変化したわけではない。(74)はやや難しいが，「死」は「肺炎」などの病状の変化結果ではなく，独立した状態であると捉えているものと考えることで解決できる。「肺炎から呼吸困難に陥った」とはやはり異なる。

これまで遠因と呼ばれてきた「から」で表される起因は，実際には時間的あるいは間に存在する段階によって「遠い」ことが意味されるのではなく，「から」本来がもつ起点としての意味が残った原因であると考えた方が妥当ではないだろうか。

また，次のように起点との連続性が考えられる起因の「から」もある。

(75) 事故の後遺症から来た麻痺がまだ残っている。

(76) 犯人はふとしたことからぼろを出した。

5．まとめ

以上，簡単に格助詞で表される起因を見てきた。

基本的に起因を表す格助詞は「で」である。デ格名詞句は典型的に出来事性の名詞であり，非意志的な述部を伴って表れる。この2つの要因の一方を欠くことによって，非意志的事態生起の媒介物としての用法と行動の理由や目的の用法へとずれ込んでいく。両方の要因を欠く場合に，手段・道具としての用法のデ格となる。

ニ格はデ格と比べて「反応」という性質を強く持つ。起因が時間的幅を持つ場合，起因と結果の時間的同時性も観察される。

カラ格は従来，遠因と呼ばれてきたが，実際には変化の前後の状態を表す起点のカラの延長上に捉えられる。

【参考文献】

奥田靖雄(1983)「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

仁田義雄(1982)「助詞類各説　から」『日本語教育事典』大修館書店